

Humpit 個展 | Swallow a room

Humpit(中川鈴音さん、平野みなみさん) インタビュー



—まずは、お二人の普段の制作活動についてお聞かせください。

中川：普段は、平野が衣裳作家、私はダンスの活動をしています。私は東京、彼女は滋賀を拠点にしている、Humpit(ハンピット)では、踊りと衣裳を並行して制作を進める試みを中心に活動しています。

—今回の展示「Swallow a room」についてお聞かせください。

中川：岐阜県のギャラリーで二週間滞在して制作したものを、今回は映像作品とインスタレーションという形式で展示しています。「わたしの部屋=わたしの身体」をコンセプトに、空間、衣裳、ダンスを制作しました。衣裳やランプなど、展示しているものは岐阜で制作し、展示室内にある映像は、こちらの展示室で撮影したものです。

—岐阜での展示と、京都の展示ではどのような違いがありましたか？

平野：岐阜県のギャラリーも商店街の中に立地していたので、ここと同じく、近所に住ま

われている方々がたくさん来てくださいました。普段、アートに精通していないような方々も見に来てくださるところは、どちらも共通していると感じています。

私たちも、周辺のお店などを訪れたりしながら展示期間を過ごしているので、この空間が部屋でもあり、制作スペースでもあり、作品でもあるような状態です。また今回の展示では、パフォーマンスをその場では行わず、撮影した映像を展示している点が岐阜での展示とは異なります。

—今回パフォーマンスを行うのではなく、映像を展示しようと思われたのは、なにか理由があるのですか？

中川：コンセプトの一つである「部屋に飲み込まれる」を体現するにあたって、衣裳も、自分が能動的にこれを着るというよりは、飲み込まれて、気づいたら着ていたという方が近い感覚だったんです。パフォーマンスではなかなかそれを視覚化することは難しかったのですが、映像だったら編集できてしまうので。思い描いた世界により近いものを表現できることに感動し、映像はふたりで「魔法」と呼んでいます（笑）。

—展示空間に入ったとき、人が不在なのにもかかわらず、布団のしわなどから、さっきまでだれかが居たかのような気配を感じて、おもしろく感じていました。

ユニットで制作をされるなかで、個人としての制作に対する向き合い方の違いや、新しい気付きはありましたか？

平野：お互いの活動の共通点として「ひとの身体を扱う」ということが一番にあると思っています。これまで自分が服をつくるときに考える身体の特徴や、想像しうる動きとは、またちょっと違うような「身体」の捉え方ができたように思います。

中川：ユニットを通して得た感覚を個人活動にも活かしたいというより、ここで得たものはここで積み重ねていきたいと思いながら活動をしています。普段の制作とは全く別の体験をしているし、特別なので。

また、今回の制作で「味方が増える」という感覚になったことがとても興味深いです。普段の上演で衣裳を纏っている自分と、今回の作品で衣裳を纏っている自分とではまったく感覚が違うんです。衣裳とダンスを同時につくらないときは、あくまで自分が板の上に立っている、という感覚ですが、特に本作は作品の内部に入り込んでいる感覚がありました。それはダンサーとして、とても助けられる部分が大きかったです。衣裳がこれまでどんな過程を経て制作されたかを知っているので、そういった面で舞台上に立つことに「居

心地の良さ」を感じています。他の作品制作とは過程が違いすぎるので、この感覚はここでしか感じられないと思っています。だからこそ、現れるシーンや動きがあるのではないかと、いうところは、今後も探っていきたいです。

—**展示内やフライヤーの、テキストの存在が印象的だと感じました。これはお二人で書かれたのでしょうか？**

平野：はい、二人で執筆しました。制作に入る前、使用する家具、話すなかで出てきたキーワードを画用紙に書きおこし、展示スペースに吊るしながら生活していて、制作の後半に三つのテキストを書きました。普段はコンセプトから練ることが多いのですが、実験的に制作プロセスの順番も変えていこうということで、今回は空間をつくり上げてからコンセプト文を執筆をしました。この空間に住みながら考えたことを反映できるので、このやり方はすごく良かったなと思います。

—**部屋に展示している細かいモチーフについてもお聞かせください。**



中川：このひまわりは、岐阜のギャラリーの近くに生えていたもので、バナナは制作期間中に食べていたものです。また、奥に展示しているのは、このギャラリーの向かいに建っているホテルです。この部屋が、外の世界と侵食し、溶け合い、混じり合うような。作品の「侵食」が作品のテーマの一つにあるので、壁にもその破片が散らばっているように展

示しています。



①



②

〈画像①〉

平野：入り口の壁に取り付けたカーテンは、ここの展示空間を見てから決めたものです。外から光が差し込むのを見て「窓」だ、と思い、あとからカーテンを取り付けました。

〈画像②〉

平野：私の母親に「自分と外と部屋が侵食しあう作品をつくっている」と話をしたら、お菓子の箱から木が生えているものが送られてきたんです。

中川：空間に家具を設置するだけでおおよその部屋は出来上がるんですけど、もう少し生活感がほしくなりました。実際、私たちが住んでいる部屋を想像したとき、商品やメーカーものの存在がひとつあると思ったんです。展示空間にはそういうものって排除したくなるんですけど、ちょうどこれがやってきたので、生活感の一因になってもらおうと思い、展示することにしました。



平野：部屋って自分の痕跡が残るよねっていう話をしていました。自分が居なくても、その跡がどんどん増殖されていく。ここで寝ていた、とか、服を着替えた、とか。ずっとここで暮らしてきた人の癖みたいなものもでてくるんじゃないかと。なので、同じものがたくさんあるとか、他の人から見ると違和感となるものを、意図的につくりあげることが難しかったんですけど、挑戦してみました。

—この空間にいると、皮膚のことを思い浮かべました。身体の内側を守るものでありながら、ずっと外部の刺激を受け続けているものでもあり、そんな相反しながらも隣り合っていて、その中間地点にある自分の身体を、より強く意識していました。

中川：自分、皮膚、衣服、部屋、外……というレイヤーの存在とその境界が曖昧になる感覚は、制作開始当初からずっとあり続けています。実際に部屋に現れているものでいうと、床から木が生えていたり、隅から土が入り込んでいる様は、その感覚から来ています。

—最後に、お二人での活動の今後の展望をお聞かせください。

平野：やってみたこととか試してみたいことを実験できる場所として Humpit をつくったので、大きな目標を掲げているわけでもないんです。でも、その時々で興味があることや、表現してみたいこととか、なかなか自分ひとりでは挑戦しづらいことを実現できる場

所でありたいと思っているので、それを今後も続けていけたらと思っています。

中川：その時々興味とかワクワクを積み重ねていけたらいいなと目標みたいに思っています。次回作はまだこれから構想を練る段階なのですが、衣服、身体、動作、衣裳、ダンスなどの原点に目を向けてみたいなということを話しています。拡張し続けることも大事ですが、まずお互いの専門領域についても勉強したいよね、という話になって。土台になる部分を勉強会のようなかたちでやっていきたいなと思っています。

(取材日：2024年11月16日)

Humpit (衣裳・空間 | 平野みなみ ダンス | 中川鈴音)

中学校の同級生である2人によるユニット。

一緒に過ごした時間に、それぞれの分野で得たものを持ち寄り、踊りと衣裳を並行して創作を進める試み

互いに新たな創作プロセスを踏んでいく中で、個々の延長線上では現れなかった時間、空間をみつけていく。

「人間の身体」を両分野の共通点として捉え、「この人がこの姿でそこに居る」ことの必然性を高めることも試みの一つとする。